

浄土 23

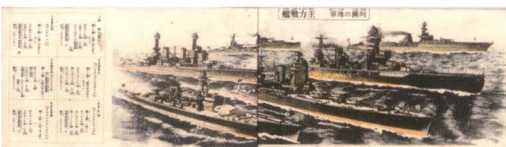
newly JCDO

2018
February
March

貧乏骨董

三宅政吉

グラフィック・デザイナー



左右 187 ミリ天地 100 ミリ。本文 62 ページ、墨と朱の二色刷り。上から、表紙、巻頭口絵、巻末口絵。左は奥付

グリコといえば、おまけが有名である。わたしたちの世代では、子どものころの日常生活に深く根ざしたお菓子であった。グリコ文庫というものがあると知ったのは、十五年前に『グリコのおまけ型録』という本のデザインと編集に関わったときである。そういえば同じ菓子メーカーのカバヤ文庫というものもあった。写真のグリコ文庫『軍歌集』はどこかの骨董市で買いためたものであるが、ちよつと記憶があいまいで、値段も憶えていない。ずっと仕舞い込んだままだった。グリコ文庫はお菓子に付いてくる引換証を集めて、希望の本と交換するものである。この本の巻末の告知

によれば、引換証十五枚で『萬國旗集』『軍歌集』『動物集』のいずれか希望する本が送られてくる。本だけではなく顕微鏡やグライダー、イタリー人形などとも交換される。いちばん枚数を要するのは三〇枚の「時局にふさはしい机の飾りもの」軍艦文鎮である。本に収録されている曲は「君が代」から始まり「軍人勅諭」「軍艦行進譜」「海行かば」「抜刀隊」と続き「敵は幾萬」「獨立守備隊の歌」まで二七曲である。譜面が掲載されている曲もあり、歌詞だけのものもある。勇ましい戦場の写真や絵も載っている。軍歌に親しみながら、戦場に思いを馳せる仕掛けというべきか。巻頭と巻末には口絵もある。

また「コードモ精神總動員」と題して、「一、毎朝宮城を遥拝みませう」から始まる十項目が並んでいる。とてもここで引用する気にはならないが、某政党が喜びそうなお題目である。初版は三五（昭和一〇）年、この本は七版で三八年の発行である。七版を数えるということは、相当数出回ったのだらう。子どもたちが食べるお菓子で、こういった滅私奉公の精神を、勇ましさを装って教育してゆく恐ろしさを感じないわけにはいかない。

浄土

2018/2・3月号 目次

浄土アーカイヴス わが心の涅槃図.....	大室了皓	2
特別編 法然上人と親鸞聖人	佐々木正	8
連載 響流十方	袖山榮輝	16
連載 江戸の川を歩く⑱	森 清鑑	20
連載小説 渡辺海旭⑧5	前田和男	24
連載 マンガ さっちゃんはネッ	かまちよしろう	31
編集後記		32



表紙題字＝中村康隆元浄土門主

表紙写真＝鬼海弘雄

アートディレクション＝近藤十四郎

協力＝迦陵頻伽舎

浄土アーカイヴス●浄土平成七年二月号より

大室了皓師追悼

わが心の涅槃図

大室了皓

晩年の釈尊には、お心を傷めたであろう悲しいことが起きている。

故里の釈迦国がその宗主国であったコーサラ国に滅ぼされ、王族以下ほとんどの人達が殺戮の悲運にあったこと。

それから、釈尊の高弟で十大弟子のうちに数えられ、右腕ともなりまた左腕ともなって、おそばに仕えてきた舍利弗と目連があいついでこの世を去ったこと。

既にお悟りを開かれた方だから、とは思うものの、二

人の訃報を耳にされるや、傍らの阿難に向かって

「佛陀には、自分の寿命を延ばす能力がそなわっているのだが」

と洩らされたと聞けば、釈尊なりの悲しみがおありだったに違いない。

お歳ははや八十歳になっておられた。

間もなく阿難らを連れ、長年過ごされた、マガダ国の首都である王舎城の靈鷲山を降り、今のベナレスを経て、道を北東にとり故郷であるかつての釈迦国への旅に赴か

れた。

老齡の釈尊の足は次第に弱まって、阿難に支えられながら進まれた。バーバの町に漸くお着きになり、チュンダの茸料理の供養を受けられてから、クシナーラの郊外に入られたところで、激しい下痢をともなった腹痛に苦しまれ、仰った。

「疲れた。横になりたい」と。

急ぎ阿難が一对の沙羅樹の間に用意した床に、右脇を下にして、足を重ねて横になられ、やがて静かに涅槃にお入りになった。

時にクシナーラの人々が、天からは天神達が、やがて摩訶迦葉ら五百人の弟子達が馳せ参じた。

鳥、獣、小動物、昆虫など多くの生き物までが集まり嘆き悲しんだと伝えている。

釈尊おん年八十歳。時は二月の満月の日の十五日であつた。

今はわが国では、太陽暦になったが、この日を持って涅槃会が行われている。

この涅槃会には涅槃図を掛けて法要が営まれていることは周知のことだが、涅槃図には様々なものがある。

大本山増上寺の涅槃図は稀にみる大幅であつて、参詣者の注目を集めている。

左右が三・五米、天地が五・三米もある。大殿内陣北側壁面に掛けられるが、他にはこれだけの大幅を掛ける場所がない。

座して拝むと誰しも圧倒されてしまう。

正譽廓山（増上寺第十三世）の裏書きがあり、元和十年（一六二四）に徳川家康の側室であつた於奈津（おなつ）の方が施主となつて、江戸初期に活躍した絵師の狩野秀信に描かせたものであるが、彼の絵はほとんど明暦の大火などで焼失していることもあつて、貴重な文化財となっている。

涅槃図で最も古いのは、中央アジアのキジール出土のもので、釈尊は沙羅双樹のもとに頬杖をついて横たわり、既に火がつけられ迦葉ただ一人が釈尊の足に手を触れているのみで、他には誰一人見えないし、動物なども全く

見られない。

日本で最古のものは、法隆寺五重塔内に配置された三十二体の塑像のある涅槃群像であるが、動物はいない。

時代が下り鎌倉期になるに従って、弟子などの群像が増え、動物なども数多く描かれるようになってきた。

増上寺のものは、鎌倉時代作と伝えられる広島浄土寺の涅槃図に著しく似通っているところがある。

両図とも、頭北面西、右脇を下にして横たわる釈尊の周囲、特に背後と左右に多くの弟子や諸天が嘆き悲しんで集まり、全面には象や獅子を初めとして、孔雀・鳩・鳥・梟ささぎなどの鳥類、蜻蛉・蟬とんぼなどの昆虫たちなどの数多くの動物が描かれているが、それらの姿かたちや、涅槃図には極めて珍しいとされている「猫」がいることも、共通していて興味深いものがある。

浄土寺本には画面の左右、下の三方を十六区画に分かち、そこに釈尊伝が、また摩耶夫人マヤ一行が忉利天たうりてんから下りてくる姿が描かれているが、増上寺本にはそれが無い。逆にこちらには満月が空高く描かれていること。また片

方は肘を立てた手枕、一方は飾り枕の違いで、あとは殆ど同じ様に見える。

大般涅槃経には五十二種の生物が集まったとされているが、猫は含まれていない。

その猫がいるのも興味深い。

なぜ經典には猫が含まれていないのか。また含まれていないのに、なぜ描かれているのか。

わずか二度のインド旅行だが、犬は多く見かけたものの、猫の姿は全く見ることができなかった。

現地の人に尋ねると、犬は家の外で過ごす、猫は内も外もないので不潔だから飼わない、昔からだという返事が返ってきた。涅槃図に無いのは、或はそのようなインドの風習からかもしれない。

増上寺本にあるのは、猫は身近な愛玩動物という日本の風習によったものではないかと思ったりした。

増上寺に涅槃図が掛かると、明徳幼稚園児達がお参りに来る。この子達を前にして話したことが幾度かあった。

「お釈迦様の回りに木が何本あるかな」

「七本」

「違うね。よく見てごらん。ほらこの木の陰にもう一本あるじゃないか。八本だね。東西南北に二本づつあるんだよ」

「あの木の葉はどうして白いんだろう。教えようか。亡くなったので木まで悲しくなつて葉が白くなったんだ」

「上の方にある丸いのはなんだろう」

「お月さま」

「そうだ。満月の日だからまん丸なんだ。昼間だけど、お空で悲しそうだね」

「たくさん動物などがあるね。これは何だろう」

「象さんだ。だけど鼻が小さいし、足に爪があるよ。動物園の象さんとして違うの」

子供の観察は鋭い。

「昔はね、日本にはいなかったんだ。だからこの絵を描いた人は、象さんを見たことが無かったんだよ。これはライオンだが、君たちの知っているとは少し違うね。やっぱり日本にいなかったからね。さて、大勢の人達や

動物たちはどうしてる」

「笑っている」

それを聞いて、どうしたことかと戸惑ったが、幼い子供たちの視線は下の方の動物に向けられていた。確かに象もライオンも笑っている様に見える。

「上の方に沢山の人がいるね。笑っているのかな。よく見てごらん」

「泣いている」

「そうだね。この人は悲しくて立っていられなくなったんだ。横になつてるだろう」

子供たちはわかつてくれたな、と安心したら

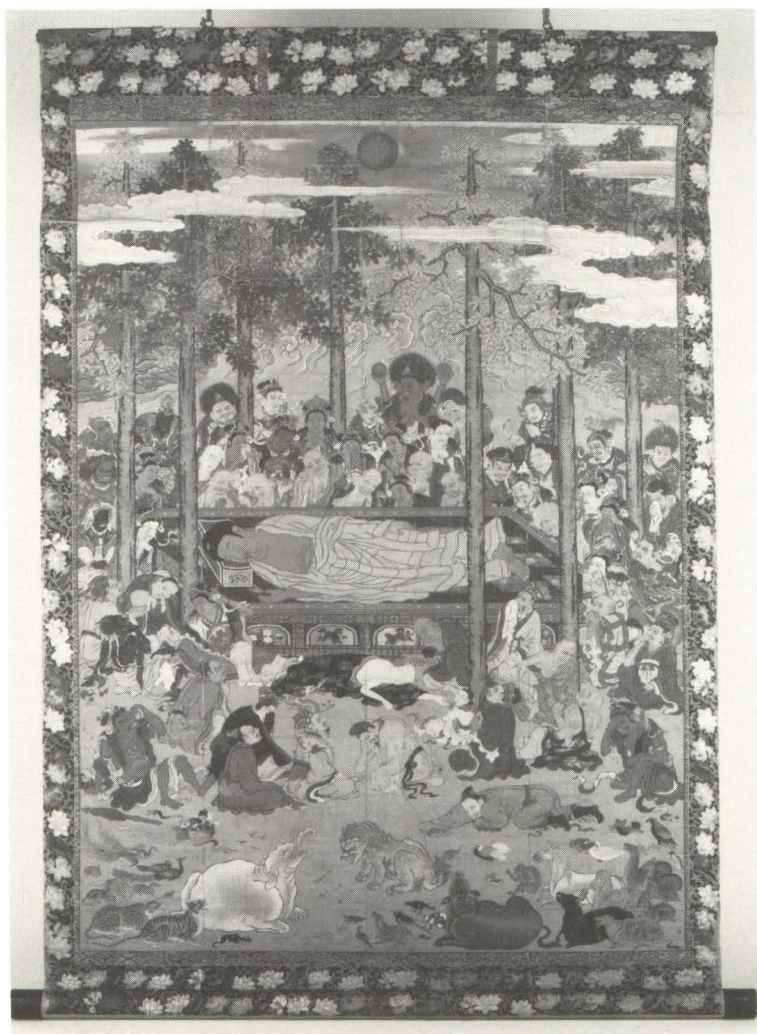
「どうして牛とか蛇とかありんこまで集まつてきたの」

素早く答えなくてはならない。

「ここに鳥がいるだろう。この鳥が飛び回つてね、大変だあ、お釈迦様が亡くなったぞ。そう言つてみんなに知らせたんだよ」

納得してくれたようだ。

「お釈迦様のお陰で、君たちは幼稚園で楽しくできるん



増上寺涅槃図

だ。ノンノンノサマと歌っているだろう。さあみんなでお手てを合わせて拝みましょう。南無阿弥陀仏……」私は人間ばかりでなく、獣や昆虫たちまでが馳せ参じて嘆き悲しんでいる涅槃図を拝しては何時も考える。

釈尊の偉大さを、また弟子を初め人々の深い尊崇の心をどのように表現したらよいか、仏教を奉じる人達の考え抜いた結果、長い年月を経て、いま私たちが拝するようになっている。その先人の釈尊に対する厚い心情にまじ動かされる。

とともに、私の時には何人の人が涙を流してくれるだろうかと、考え込む。

住職という立場で多くの「死」を知っているが、幼児や若い人の時はともかく、平均年齢を越した人の場合などは、殆どが義理で焼香にやってくることを、傍らにいて何度も経験する。

時には近親者でさえ涙しないことがある。

そうした時、故人はどんな生き方をして来たのだろうか。と考えると、故人はどんな生き方をして来たのだろうか。と考えると、故人はどんな生き方をして来たのだろうか。

やがて来る私の時には、家族が泣くのは当然であって、そうでなければ最低の人間になってしまう。

そして、赤の他人が五人でよいから、心底から涙を流してくれたら、我が人生に悔いはない。またそうなれるように、今までの反省の上に立って、これからの人生を送るにはどうすべきか。

涅槃図の釈尊は、何時も私に説いておられる、と思えてならない。

法然上人鑽迎会理事長

平成二十九年十一月十四日没

講演概録

〈前編〉

法然上人鑽仰会主催講演会 平成二十八年六月二十日 増上寺慈雲閣

法然上人と親鸞聖人

佐々木正

今日は、法然上人鑽仰会のほうから「法然上人と親鸞聖人」ということで話をしてほしいということです。全く我が意を得たりといえますか、法然上人お一人を取り上げても、この浄土教の実相ははつきりしないし、また親鸞聖人お一人を取り上げても、これも足りないものがあると、私は考えております。

私は前々から法然上人と親鸞聖人を一体として受け止める。ここに、念仏、他力、浄土の、本願念仏の教えが、具体的に歴史上に顕現するというように思っておりますので、今日は本当にありがたい法題をいただいたと思っております。

今はどうしても、セクト的といえますか、宗派でそれぞれの開祖、宗祖と受け取る傾向が強くて、浄土宗さんのほうは法然上人が絶対ということですし、浄土真宗さんのほうは、いや、親鸞聖人だということで、全く別々に受け取められているようなところがあり

ます。

しかし、私は、法然上人と親鸞聖人を学んでいく中で、言ってみれば、車の両輪で、法然上人だけでも足りないし、親鸞聖人だけでも足りないということで、お二人を一体として捉えて考えるということをしています。

今は「コラボ」という言葉がはやっておりますが、お二人のコラボレーション、共同作業によって、この念仏の教えが、現代の私たちにまで伝わっていると言っていると思いますので、法然上人と親鸞聖人のお二方で、一つの宗教的人格を形づくっていると言ってもいいと思います。

今日のお話の中では、法然上人のお話だけでいいで、親鸞聖人のお話は詳しくできないかもしれませんが、法然上人から親鸞聖人の流れというか、なぜお二方が一体なのかということ、これからお話したいと思います。

その前に、私事になりますが、なぜ私が法然上人、親鸞聖人に会ったかというか、お二人のことを学ぶようになったかということ、少し申し上げたいと思います。

私は、昭和二十年、終戦の年に、九州の大分県臼杵市というところの、浄土真宗大谷派、本山は東本願寺ですが、そのお寺の三男坊として生まれました。

子供のころから育っていく中で、だんだん寺が嫌になっていきました。寺は長男が継ぐだろう、長男がだめでも次男がいるので、三男まで回ってくることがないだろうと思っていました。

小学校、中学校時代には、友だちから、「おまえのうちは葬式でメシを食ってる。死人を食い物にしてる」という言葉をかけられたり、高校時代は、親の職業を書く欄に丸をつ

けることがあったとき、どこに丸をつければいいかわからなかったので、担任の先生に聞くと、「おまえのうちは寺だから、サービス業だ」と言われました。

だから、「坊主だけは絶対なるまい」と思っていて、大学を卒業して、サラリーマンになりましたが、勤めていると、だんだんサラリーマンは不向きであると、私も適応障害みたいになって、勤めて八年、いろいろ悩んでおりました。

そういう状況のとき、すぐ上の兄から、「そんなんだつたら、仏教を一度勉強してみたらどうか」というアドバイスを受けまして、仕事を辞めて、京都に行き、浄土真宗大谷派、東本願寺が経営する専門学校がありまして、ここは、一年間の全寮制で、そこを卒業すると、住職の資格が取れるという学校に入りました。

そこを卒業してから、さらに、五年ほど、職員として勉強して、そこで初めて、私は、『歎異抄』という書物に出会ったわけです。

それまでは、仏教を毛嫌いするというか、「坊主には絶対ならない」という固い決意をしていたんですが、以上のようないきさつで、親鸞聖人を学ぶことになったわけです。

そして、親鸞聖人を学んでいくと、やはり、法然上人のことが、当然出てまいります。特に、『歎異抄』の第二条を、皆さんは親しんでいらっしゃる方がおられると思いますが、ここが一番すばらしい章ですね。

そこでは、親鸞聖人が法然上人との出会いを語っておられます。そこを読んでみます。「親鸞におきては、ただ念仏して、弥陀に助けられまゐらすべしと、よき人の仰せをかぶりて信ずるほかに、別の子細しさいなきなり」

と。この「よき人」というのは法然上人ですね。

そして、

「念仏は、まことに浄土に生まるるたねにてやはんべるらん。また、地獄に墮つる業にてやはんべるらん。総じてもって存知せざるなり」

そして、この次がすごいですね。

「たとひ法然上人にすかされまゐらせて、念仏して地獄に落ちたりとも、さらに後悔すべからず候ふ」

この言葉は、私は、全世界の宗教史の関連の書物を全部含めても、これほど純粹な、師弟の関係を表明した言葉はないのではないかと思います。

実は、私が京都で勉強しているときに、たまたまフランスから仏教を勉強に来た一人の女性がいきました。日本人と結婚しましたので、藤田・ジャクリンという名前になっていますが、私が京都にいたころ、フランスからやってこられたわけです。

この方は、私と同じ年ぐらいで、パリに生まれたけれども、家庭的にいろいろな問題があつて、教会が経営する孤兒院のようなところで育つたというふうにも聞いておりますが、四、五歳のころから死の問題で悩んでいたそうです。

それで、あちこちいろいろなところを訪ねて、サルトルにも会つて、死の問題について尋ねたけれども、この問題は解決がつかないということで、たまたま十四歳のときに、パリで日本の活け花の展覧会があつたそうです。

そこで、非常に感銘を受けたところ、その説明の人が、「この活け花と仏教は大変深い関係にある」と言われ、仏教に関心を持つて、そのあと、パリの国会図書館の仏教書コーナーに行ったそうです。

そして、そこにあつた、薄汚れた一冊の本を手にしたところ、それが、フランス語訳の『歎異抄』だつたということです。そこで、これを読んだあと、どういふ感想を述べたかという、「読む前の自分に戻れなくなりました」とおっしゃつたそうです。本当にすばらしい感想ですね。

そこで、アルバイトをしてお金を貯めて、二十歳を過ぎてから、単身で日本にやつてこられたわけです。何とシベリア鉄道を使つて、横浜に着いたということです。そこで初めて、親鸞聖人が七百年も前に亡くなつた方であることを知つたということです。

そして、彼女の言葉で言えば「親鸞おじさまに会いたい」といふ、その一念で日本にやつてきたということでした。

このパリジェンヌをこれほどまでに突き動かした言葉というのは、『歎異抄』の第二条の「たとへ、法然上人にだまされて念仏して、地獄に落ちて、後悔いたしません」といふ一言だつたということです。

この言葉は、衝撃力を持つた、宗教の根本を示した言葉であると思つております。

さて、先ほど言つたとおり、法然上人と親鸞聖人は一体化して捉える視点が大事だといふことで、初めに法然上人のことをお話し申し上げ、時間がありましたら、親鸞聖人のお話したいと思いますが、多分、親鸞聖人のほうは、付け足しになるかとは思つております。

皆さんもよくご存じと思いますが、法然上人のお話をいたします。

法然上人と親鸞聖人は、年齢的には四十歳違います。亡くなつたお年が、法然上人が八十歳で、親鸞聖人は九十歳ですから、五十年単位の法要が、同じ年に催されるわけです。

これは、本当に不思議なことで、四年前でしたか、法然上人の八百回忌、親鸞聖人の七百五十回忌が同じ年に行われています。

それはともかく、法然上人と親鸞聖人は一体として捉えて、別々の宗教的人格ではないという思いから、私は、真宗大谷派、東本願寺が本山の宗派に属していましたが、法然上人の法要と親鸞聖人の法要は一緒にやったほうがいいということで、本山に申し上げたことがあります。誰か聞く耳を持ちませんでした。しかし、次の五十年後の法要は、ぜひ一緒に行ってほしいと願っております。

そして、師がいかにすばらしいかということは、その師が書いたこと、話したことよりも、どのような弟子が生まれたかによって証明されると思っています。すばらしい弟子が生まれたことによって、本物性といえますか、すばらしさが証明されると思います。

ですから、親鸞聖人が法然上人の弟子になられたということは、いかに法然上人が宗教的人格としてすばらしかったかということ、逆証していることになるわけです。

そのことをあらわしたすばらしい弟子の一人が、熊谷次郎直実だと思います。ご存じのとおり、源平の争いに加わり、一の谷の合戦において、平敦盛の首をはねたというところが大変有名で、歌舞伎や謡曲などいろいろな形で取り上げられています。

この熊谷直実は、「坂東の阿弥陀仏（ホトケ）」と言っています。「坂東」というのは関東のことですが、法然上人ご自身がこのようにおっしゃっていたのです。

熊谷については伝記でもいろいろ書かれています。大事なエピソードとと思っていることがあります。

大原問答のあとすぐに、摂政関白を歴任した九条兼実という貴族が、法然上人の弟子に

なつて、屋敷に何度もお招きしていたのですが、余りにも頻繁に呼ばれるため、「病氣である」と言つて、断つたこともあるそうです。

法然上人が法難で流罪になったときには、「自分が身代わりになつていいから、法然上人を助けてほしい」と言っているぐらい、法然上人に帰依し、心酔していたのですが、あるとき、熊谷は、自分は呼ばれていないのにもかかわらず、法然上人に随行していきました。

法然上人が兼実の屋敷に上がつて、奥座敷で法談を始めたとき、熊谷は、その屋敷に上る前の靴脱ぎ石のところに控えていました。そうすると、遠くから法然上人と兼実の話がかすかに聞こえてきました。

そのときに、兼実と言つた言葉がすばらしいですね。「法然上人の尊い教えが聞こえないではないか。浄土ではこのような差別はあるまいに」と言っているのです。

「話の全体が聞こえなくて、わずかにしか聞こえない。これはおかしいじゃないか。浄土という世界ではこんな差別はないはずなのに」ということを、伝記では、「しかり声」となつていて、もう本当にわめき散らしたということなんですね。

その声が兼実にも聞こえたので、座敷に上げて、法然上人のお話が聞こえる場所に座つてもらつたということです。

これはすばらしいエピソードだと思います。常に法然上人のお膝元で説法を聞いている中で、平等ということに気づいていた、目覚めていたわけで、法然上人は何を説法しておられたかということが、直実のこのエピソードによつて逆証されていると言えます。

法然上人は、人間の平等ということを根幹にして、教えを説いておられたということで、

それは、法然上人の主著の『選択集』でもよくわかります。

「念仏は易きが故に一切に通ず。諸行は難きが故に諸機に通ぜず。しかれば則ち一切衆生をして平等に往生せしめんがために、難を捨てて易を取りて、本願としたまうか。(中略)まさに知るべし。上の諸行等をもちて本願とせば、往生を得る者は少なく、往生せざる者は多からん。しかれば則ち、弥陀如来、法蔵比丘の昔、平等の慈悲に催されて、普く一切を摂せんがために、造像起塔等の諸行をもちて、往生の本願としたまわず。ただ称名念仏の一行をもちて、その本願としたまえり。」

ここに「平等の慈悲」という言葉があります。これをいろいろな形で法然上人は説いておられます。それを熊谷は本当に体得、身につけたから、九条兼実邸で、「こんな平等はあるものか。浄土ではこんなことがあるはずがないのに」という異議を唱えたわけです。ですから、この熊谷の言動によって、法然上人が何を説いておられたかということが逆証されると思っております。

(つづく)

佐々木正

一九四五年大分県生まれ。

千葉大学卒業後公務員を経て、

一九九一年真宗大谷派 萬福寺前任職

草庵社主宰 季刊『法然思想』代表

『親鸞始記』(筑摩書房)

『今を生きるための歎異抄入門』(平凡社新書)

『親鸞再考』(法蔵館)

『法然の思想 親鸞の実践』(青土社)

など著書多数

身を律するのは善いことだ。言葉を慎むのは善いことだ。心を抑えることは善いことだ。あらゆることについて「己を」を守るのは善いことである。あらゆることについて自制する修行僧はあらゆる苦しみから開放される。

【釈尊『ダンマパダ』第三六二偈試訳】

恩師、松濤誠達先生が極楽に往生なされて一年が過ぎた。大正大学の元学長で古代インドの文献を専門領域とする先生の学風はオランダ留学時代に培われたという文化人類学の手法を用いたものであった。先生は梵語の文献を精読するだけではなく、その行間に隠れている意味を読み解こうとなされた。例えばバラモン教の祭祀の文献であれば祭官が唱えるマントラの回数に着目し、その「数」に託された意味を読み解いた。仏典であれば釈尊が成道後も修行していた理由を、釈尊が滞在していた「場所」から読み解いた。人間の思考や感性が行動に表れ、それが文献の行間に反映されていると考えておられたのだろうか。授業に古代インドの文学作品を取り上げておられたのも、そうした考えに立脚したものだと思う。

先生の授業は少人数の演習形式で、学生が順番に梵語の原文を一行ずつ訳し、原文の一語一語について文法解釈を示すというものであった。文法解釈が解らないと訳文にならないのだ。主語はどの単語か、形容詞の修飾先はそれで正しいのか、動詞と主語の関係は合っているか、目的語は間違っていないか。土日は原文と辞書と文法書とにらめっこしながら予習に費やし、いざ授業となると一週間かけて訳した分があつという間に尽き果てた。

学部生の時、ある文章の文法解釈が解らず支離滅裂な訳文のまま授業に臨んだことがあった。運悪く、私にその文章を訳す順番が回ってきた。言い訳しつつ「分かりません」と答えた。すると先生は「支離滅裂でいいから君の訳文を言いなさい。どこでどう躓いているか、それを教えるのが教師の役割なのだから」とおっしゃり、私の訳を聞いた。そして私の文法解釈の至らぬ点を指摘され、正しい訳文へと誘導してくださった。

大学院生の時、瞑想法に関する梵語の仏典を講読していた。順番で私が訳文を示した。すると先生はもう一度訳文を繰り返すように仰った。大学院ではもう文法解釈の提示を略していたが、学部の授業のように私に文法解釈を求めた。すると先生は「なるほど、そうですか。私は長年、ここが何を言いたいのか読みづらい文章だと思っていましたが、君の解釈ならスムーズに意味が通りますね。私の読み方を改めます」とおっしゃった。

先生の学風は文献を正確に読むことに裏付けられていた。授業もそのことに重きがあった。学生の意見であっても、自分より正しいと判断すれば自説を訂正し採り入れる。いかなる学問であれ、基礎データに誤りがあれば学説は成り立たない。先生は学問に対して、どこまでも真摯であった。

今年の正月、某有名大学の昨年の入試で出題ミスとの報道があった。外部から二度ミスを指摘されたが、間違いはないはずという過信やプライドがミスの指摘に向き合うことを阻んでいたのであろうか、三度目の指摘があつてはじめて本格的な調査を始めたという。そしてようやくミスを認め発表、謝罪に至つた。遅きに失したとはいえ件の大学は過ちを認め謝罪した。本来合格するはずであつた昨年の受験生には誠実に対応するという。

思うに、人間の心は自分に都合よくできている。人間に過ちは付きものなのに、他人に頭を下げたくない自分がある。自分の過ちを誰かのせいにしたり、事実をねじ曲げ、ミスから目を反らす自分がある。ミスの指摘を力尽くで黙らせようとする自分がある。でも、それではきっと自分が苦しくなるのだ。

先生の授業は文献の一行一行、単語一つ一つに真摯に、そして謙虚に向き合うものだった。間違ひだらけの学生の訳文に丁寧に接し、励ましの言葉を与え、温かく見守るように教えて下さった。言い訳も誤魔化しも一切きかない授業であつたが、それが幸せな時間であつたと今しみじみと思うのだ。

(袖山榮輝)

江戸の川 を歩く

浜川橋

立会川の河口は、品川宿の南にあり、江戸湾に注いでいる。源流は目黒の碑文谷池、清水池であり、辺り一面の田畑を縫って東海道に架かる浜川橋から直接、海に流れ込んでいる。

浜川橋。鈴ヶ森獄門場に送られる罪人は、この橋の袂で親族、関係者と最後の別れを告げ、直ぐ南、東海道に面する鈴ヶ森刑場で露と消えるわけだ。そこで通称、「泪橋」。橋の目の前は江戸湾の波。左に土佐山内

家の荷物揚場がある。この辺り、東海道は正に海縁を走る道である。波が押し寄せ、カメメが飛び交い、帆掛け船が漁をしている。

周囲は、大井村の田畑。立会川沿いに土佐藩の下屋敷があり、山内容堂公は、この山の上から美しい眼下の海を眺め、酒を酌むことをこよなく愛でた。彼は大変な酒豪で字も「鯨海」。ために、遺言により、今もこの下屋敷の一郭に眠っている。

江戸の人々は何故立会川と呼んだのか、諸説ある。一五二四年、江戸攻撃の北条氏綱とこれに立ち向かう

第十八回

江戸ウオーカー
森清鑑

上杉朝興が、この川を挟んで合戦。それで「太刀会川」と処の人々は呼び、いつしか立会川になったという説。また、東海道に架かる、江戸湾沿いに架かる浜川橋での、罪人と縁者の泪の別れ、最後の見送りを受ける場所と云うことから、立ち会いの場、すなわち立会川という説。恐らく、江戸の人は、立会川と聞いてまず脳裡に浮かぶのは、こちらのほうであろう。まだ、十七歳の少女、八百屋お七は、この橋の袂で縁者と別れ、そして橋を渡って、鈴ヶ森で火炙りの刑に処せられるのである。参集した人々は、涙涙であつたらう。罪人の霊を弔うためか、この浜川橋を挟んで諏訪社と神明社（天祖神社）がある。

土佐藩下屋敷

浜川橋から船を漕いでちょっと上流に行くと右手に一万六千坪に及ぶ山内容堂の下屋敷。川は、同屋敷の南縁を走っており、見上げると小高い岡が迫り上がっている。ここで屋敷内から湧き出た流れが立会川に合流。

そこを過ぎると、流れは、一万八千五百坪の島津斉

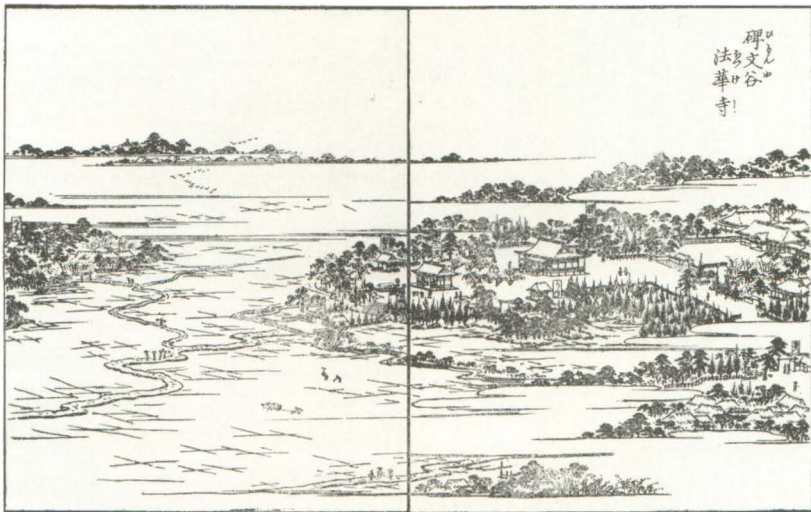


彬の抱え屋敷内を突つ切る。敷地内を立会川は流れているわけだ。この屋敷を出ると辺りは全て大井村の田畑。池上道に架かる橋を潜つてさらに行くとな農道の中立会橋。流れは蛇行しながら諸処から湧き出た小さな流れを加えながら、田や畑の中を進む。稲荷社や東光寺の屋根が見える。さらに西へと進むと、荏原郡平塚村。大字中延でも北からの小川が流入している。辺り一面、のどかな田園風景。寺社が点在。誠に良い景色である。

中延で幾つもの湧き水を加え、幾筋もの田畑を潤す複雑な流れとなつて北上。正に、立会川は農作に欠くべからざる川である。そして鬼子母神法界塚近くに來ると、清水池から南下してきた流れが加わる。

清水池

清水池。湧水池で江戸では弁財天を奉り、「池の上池」と称されていた。今は、目黒区で唯一の釣り堀として大賑わいを見せているが、当時は田畑を潤す、貴重な灌漑水源であった。規模は小さいが水量は豊富で溢れ出る水が下を流れる立会川に合流していたのである。



◆江戸名所図会 雪旦 碑文谷法華寺：中央法華寺、その手前を流れる小川が立会川。農道を挟んで向かいが碑文谷八幡

立会川のこの辺りは、今は、立会川緑道として桜の古木を愛でる散歩道として名高い。

円融寺

すると流れは、広大な寺域を持つ円融寺の東南の角に出る。比叡山延暦寺の末寺として八五三年に開山。鎌倉時代に日蓮の弟子日源が日蓮宗に改宗。以来、法華寺として栄えた。江戸初期には坊舎十八、末寺七十五に及び、大変な賑わいを見せた。徳川一門の擁護もあったが、元禄年間に弾圧を受け、再び天台宗に改宗。美しい釈迦堂は室町初期の建立。仁王像で有名。こうした経緯から、江戸名所図会で雪旦は「碑文谷法華寺」としてこの辺りの風景を描いている。門前をぐるりと巡る小川が立会川である。流れは、円融寺の南、西側をぐるりと舐め、碑文谷村の田畑を北上し、巖島神社弁天池に出る（碑文谷公園碑文谷池）。

碑文谷池

碑文谷池は、江戸時代現在よりもずっと大きく、木々が鬱蒼と茂る自然のちよつとした溪谷のような状態で

あった。ここから湧き出る水は豊富で立会川となり、水田灌漑用のいわば貯水池として碑文谷村の農民がこぞって擁護し、池の中央に巖島神社を設け、命の水とも言える、湧泉の保存を祈願してきた。江戸初期では、野鴨が豊富に生息していたため、將軍の鷹狩りの好適地として重用される。歴代の將軍が必ず訪れる鷹狩り御用地に指定されている。近在の鷹番町という地名は、そこに鷹番があり、鷹匠が鷹の訓練に使っていた名残である（鷹番幼稚園）。今の、東急学芸大学駅辺りと碑文谷池間は、鬱蒼とした竹林に覆われていた。このように、江戸期、農村を潤してきた立会川の流れは、今や河口の浜川橋近辺のみ。残りは、全て緑道か道路と化している。一時期、この流れも汚染が甚だしかったが、なんと遠くのＪＲ馬喰町、東京駅間のトンネル内から湧き出た水をひくことよって浄化され、今日ではボラが遡上し、話題となっている。

小説 快僧渡辺海旭

壺中に月を求めて

白露せめぎ合う満州に降り立つ

前田和男

第八十五回

第二部

ライオン 来江の古城遥かなり

いざ、シベリア鉄道で懐かしの故国へ④

ストラスブルクを発って十二日後、渡辺海旭は北条太洋が待つ奉天駅に降り立つと、北条が用意してくれていた駅前の中華料理店の個室で十余年ぶりの再会をはたした。海旭の剃髪法衣の出立ちに、北条は開口一番、「おぬし、その恰好は、いったいどうした？ 車中で怪しまれなかったか？」と訊ねた。

「き、帰国にあたって大いなる決意を形にしたのだ」と、海旭はその背後にあるX嬢との永訣については秘したまま静かに応じた。

北条はそれ以上追及せずと言った。「さあ、まずはおぬしの手紙にあったとおり、二晩か三晩、とことん飲み明かして積もる話をしようじゃないか。とっておきの酒を用意したぞ」

「ご、好意には感謝するが、酒は金輪際やめにした。ほ、僕には、やる事が山ほどあるからだ」と言ってから頭をつるり撫でると、「そ、その決意のほどは、ご覧のとおりだ」北条は海旭の揺るぎなき決心を理解したようだった。「よし、わかった。おぬしの決意やよしだ。俺は茅台、貴兄は中国茶の中でも第一等の茉莉花茶で、久闊を叙そうじゃないか」

給仕が運んできた透明と薄黄の液体が注がれたそれぞれのグラスを重ねると、北条はこう促した。「おぬしは、やる事が山ほどあるといったが、それは何なのだ。まずはそれを開陳してもらおうか」

海旭は、深くうなずくと、X嬢と永訣するにあたって彼女と約した「使命」を、X嬢との関わりは秘して北条にも繰り返した。

「故国に戻ったら『大乘仏教の西漸』と『女子教育の充実』を図る。その上で、もう一つ加えたい。それは、帰国をしたら、近代化の

なかで落ちこぼれた貧しい人々を救済する事業を起こす。これも、ドイツで社会主義者や宗教家たちの実践から学んだものだが、それが現代における大乘の教えの実践であり、仏教が社会宗教であることの具現化だと思うからだ」

ついで海旭は、珍田から仲介された宗門の意向にも応えるつもりだと言って、その概要をこう告げた。一つは、翌年に控える「法然上人七百年遠忌事業」に海旭の舶来新知識を役立てること。もう一つは、かつて珍田が英語を教えていた母校・浄土宗東京支校が国の認可を受けて一般の師弟も学べる中学校になったので、その校長を引き受けること、である。

それまで聞き役に回っていた北条だったが、ここで攻守と場所を代えた。

「なるほど、それは大儀だ。頭を丸めるだけでなく、酒も断たなければ、とてもじゃないがやりとげられんだろうな」

北条は茅台酒の残りをぐびりとあおり口元をぬぐった。「今度は俺が抱負を語る番だ」と言つて海旭とのなれそめである「経緯会」をぬけて、なぜ外交官になったかを語り始めた。

北条によれば、当初古川老川が呼びかけた「経緯会」の「仏教をもつて人類全体に徳沢をもたらす」という遠大なる理想に大いに共鳴したが、やがてこの汚濁にまみれた権謀術数の世界を変えるのに仏教思想はすぐには役に立たない、まずは実践だと三十を前に外交の世界に飛び込みフィリピン、南米の駐在勤務をへて三年前から清国に赴任。そこで欧米列強に蚕食された後発国の優勝劣敗の無残を知り、このままでは日本も危ないと痛感したという。

北条は一服つくつと注ぎたした茅台酒をなめて言つた。「近いうちに清王朝は倒れる」

それが孫文による「辛亥革命」という形での中ししたことを帰国の一年後に知つて、海旭は北条の情報収集力に驚かされることになる

が、このとき海旭の関心を惹いたのは、それから先の言葉だった。「いよいよ満蒙独立運動のはじまりだ。日本にとって、いやアジアの民にとって絶好のチャンス到来だ」

海旭の脳裏では、眠れる獅子・清の滅亡と満蒙独立がすぐにはつながらなかった。それを察したように、北条は畳みかけた。

「俺のみるところ孫文や袁世凱などの親玉連は口では五族協和を叫んでおるが、実は中華至上主義者で本心は以夷征夷（夷をもって夷を征す）。これでは列強の思うつぼだ。列強に支那と満蒙がのまれたら日本は終わりだ」海旭は深くうなずくとつぶやいた。「た、たしかにあの国の歴史は以夷征夷だ。大乘精神にもとるものでいただけない」

北条は膝を叩くと言つた。「さすがは俠客坊主だ、いいことをいう。そうなのだ、満蒙独立は五族協和の狼煙であり、それこそまさに大乘精神のアジア的实践なのだ」

二人の談論は思ひ出話を挟みつつ、北条の

満蒙独立論と大アジア主義を中心に深更まで
続き酒がきれたところで翌日に持ち越された。

*

話は尽きなかったが、やがて別れの時が
やってきた。北条は別れ際に、再び持論を持
ち出して、海旭に迫った。「どうだ、俺と一
緒にアジアから世界を変えんか。ここ満蒙の
地に五族協和の学校をつくり、大乘の精神で
感化を行なうのだ。それは、おぬしが自らに
使命として課している『大乘仏教の西漸』に
も、『女子教育の普及』にも、そして貧しい人々
を救済する事業にもつながる。アジアには脱
亜で落ちこぼれた細民が日本以上にいる。今
すぐとはいわん。日本でめどをつけたら、そ
の成果をひっさげて満蒙へやってこい。それ
まで俺はこの地の草となっておぬしを待つて
いる」

当時もその後も外務省と軍は、大アジア主
義者たちを都合よく利用はしても腹の中では
「大陸浪人」とさげすんでいたが、現場には

北条のような共鳴者がいたことに海旭は驚く
とともに、これはやがて「世論」になると直
感し、自らも惹かれるものを感じたのだった。
実際、それから十年ほど後、「俺も行くか
ら君も行け 狭い日本にや住み飽いた 海の
彼方に支那がある」で始まる「馬賊の唄」が
若者たちの愛唱歌となり、彼らを大陸へとい
ざなうことになる。

「五族協和の興亜論」はいささか粗にして飛
躍があるものの、理に走った外交論にはない
熱があり、海旭の琴線を大いにふるわせた。
五年ほど前、親しくしていたロシアの革命党
員が日露戦争後に祖国で起きた反政府蜂起に
呼応すべく勇んで帰国するというので、饒別
を渡しながら羨ましく感じたときのこと、脳
裏に蘇った。彼らと同じ胸の高鳴りを自分も
共有できるかもしれない。「人生五十年」の
往時にあつて、海旭には漠たる予感があつた
のではないか。自らに残された時間はせいぜ
い二十年しかない。それをどうまっとうすべ

きか、と。

できるものなら、北条の誘いに乗って、自らに課した使命を狭い日本だけでなく、広くアジアに求めてやりおおせてみたいと内心で思ったとしてもおかしくはない。『俠客坊主』海旭の胸中に、「大アジア主義」が人生の集大成本業として宿った瞬間だった。

満蒙の地に眠る海旭の遺骨

と、ここで読者諸賢から、いくらなんでも筆者の妄想がすぎるのではないかとの指弾を受けるかもしれないので、時計の針を一気に先送りして、読者の疑念に決着をつけておこう。

海旭は、帰国して六年後の大正五年、芝中の教え子だった柴田徳次郎の要請をうけて大アジア主義を担う「国土」を養成するための高等教育機関「国土館」創設の賛同人の一人に名を連ねたことで、すでに玄洋社に関わっていた柴田の紹介により大アジア主義の主導

者である頭山満と出会い、それが機縁でインド独立運動の首魁で日本に亡命していたラス・ビハリ・ボースをはじめ多くのアジアの志士たちを匿い、死の直前には満州建国の理想成就に献身する人材養成の実践的學校「鏡泊学園」の初代総長に就任することになる。

まさに大アジア主義者への傾倒を物語る経緯と履歴だが、これまでの研究や資料が示すところでは、それは海旭が自ら求めたものではなく、物事を頼まれると断われない江戸っ子、渡辺海旭の「俠客氣質」のなせるわざであるかのように語られてきた。

しかし、筆者のみるところ、大アジア主義は海旭自身が人生の総仕上げとして主体的に選択したものであり、その原点は北条との出会いにあったと思われるのではない。

その隠れもなき物証を見つけたので、以下にそれを挙げよう。

それは、海旭の最後の肩書きとなった「鏡泊学園」総長に次ぐ地位にあった学園総務の

山田第一を主人公にした小説「鏡泊湖」である。作者は鎌田研一（本名・徳座研一）、当時戦争文学の一ジャンルともてはやされた「満州建国文学」の第一人者であった。そこには、山田が全国から志願してきた二百人の生徒を引き連れて勇躍東京駅を出立するシーンが描かれ、そこに海旭が登場する。

「小野山（志願生徒）は、純白な寒冷紗に包んだ白木の箱を両手に捧げてゐた。その中には、総務より一つ位の高い総長に就任すると間もなく敗血症で死んだ渡辺海旭の分骨が納められてゐた。渡辺は、ドイツに留学して梵語学や宗教学を究め、長く国士館の教授を勤め、大蔵経の邦訳を監修し、社会事業にも関係したことがある人で、英邁な資性と高潔な人格の持主であつた。その霊を湖畔の丘に祀つて、命日には教職員も生徒も一緒になつて厳肅な祭祀を営まうといふ山田の肚なのだ。丘の上に祀られた見えざる霊は学園の光になるだらう」（『満蒙開拓文学選集』第四巻、ゆ

「御霊ヶ丘」に祭れる埋骨者氏名

官職氏名	死亡當時年齢	原籍地	備考
總長 渡邊海旭	六十二歳	東京府	昭和八年一月二十三日東京にて病死
總務 山田第一	四十三歳	宮崎縣	
幹事 今井和佐久	三十三歳	愛媛縣	
指導員 榎下清	三十七歳	東京府	
學生 龜澤貞雄	二十二歳	宮崎縣	昭和九年五月十六日大連領に於て病死
同 菅原寅夫	二十一歳	同	
同 空田華雄	同	同	
同 後藤宇三郎	同	岐阜縣	
通譯 武田六藏	二十三歳	新潟縣	昭和九年六月九日ソイオウイ附近に於て病死
陸軍歩兵伍長 樺橋勝三	三十八歳	滿洲人	
陸軍歩兵上等兵 熊澤孝藏	二十二歳	神奈川縣	
同 上野五郎	二十一歳	山梨縣	
同 中山芳富	二十歳	同	昭和九年六月九日ソイオウイ附近に於て病死
同 川名謙吾	二十一歳	千葉縣	
同 岩見正義	二十二歳	神奈川縣	
陸軍歩兵伍長 新倉開司	同	同	
陸軍歩兵上等兵 平戸春吉	同	同	昭和九年八月十九日大連領に於て病死
同 黒川梅吉	同	同	
同 石川誠	同	千葉縣	
同 小野山正三	二十一歳	同	
學生 岡田敏男	二十歳	埼玉縣	昭和九年十二月二十一日夜化機路病院にて病死

まに書房、六六頁)

またまた読者諸賢から、取材に基づくモデル小説ではあっても所詮は小説で確たる物証とするには不足ではないかとの指弾を受けるかもしれない。たとえば海旭の遺骨はどうなったのかは語られていない。ならばと、国会図書館にまで出向いて資料を渉猟しているうちに、ついに「動かぬ物証」を発見した。

それは『満州鏡泊学園第五次経過報告書昭和十年一月現在』(満州鏡泊学園東京事務所刊)という小冊子で、その巻末には「御霊ヶ丘に祭れる埋骨者氏名」が掲げられ、その筆頭に「総長・渡辺海旭」、つづいて「総務の山田某」の名があるではないか。(図版参照)

実は、昭和八年に海旭の遺骨を抱えて鏡泊湖畔へ向かった山田だったが、当地は「匪賊」に占拠されていたために、近隣の町へ一時避難。翌年、小康を得たと判断した山田は学園建設にとりかかるが、「匪賊」に襲撃されて生徒ら十三名と共に戦死。その後、学園に「御

霊ヶ丘」が築かれ、はるばる故国から運ばれた海旭の遺骨は、ようよう山田たち殉死者と共に祀られたのである。

最後に、誤解なきように補足を加えておくと、だからといって渡辺海旭が時の政府や軍部におもねった「戦争協力者」を意味しない。政府と軍部にとつて「五族協和の大アジア主義」は、「日韓併合」をはじめ日本がアジアの「盟主」となるための方便でしかなかったが、海旭の生涯の盟友であった頭山満をはじめ心ある真の大アジア主義者たちは、「列強の平等公平主義が白人種限定のそれと同工異曲ではないか」と終始警戒的であった。その頭山が海旭の百箇日法要の帰路、「世の中には生きていても死んでいるものがあるが、渡辺和尚は死んでも生きています」と言ったそうだが、ならば渡辺海旭は今も分身が葬られた満蒙の地で「俠客坊主」として真の大アジア主義の見果てぬ夢を見つづけているのではないだろうか。

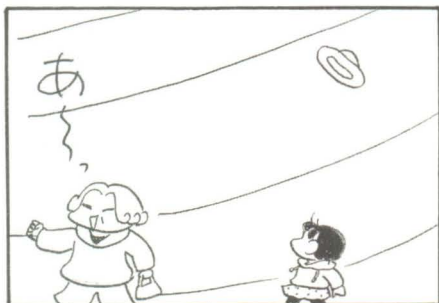
(つづく)

148

かい目

さっちゃんねネッ

かまち♡よろう



かまちよろう先生作新聞四コマ漫画「ゴンちゃん」が各地方新聞に掲載されています。(京都新聞・静岡新聞・山梨日日新聞・北日本新聞・福島民報・宮崎日日新聞・新日本海新聞・神戸新聞・岐阜新聞・中国新聞・四国新聞)

編集後記

寒空に散歩いやがる仔犬かな 岱潤

昨年十一月、私ども法然上人鑽仰会にとつてかけがえのない方が往生されました。一九九三（平成五）年に月刊『浄土』が現在の装丁に替わり、この会が新しく発足して以来、当に軸として会の運営に携わり、事務局長、理事長を歴任され、つい最近まで編集会議にも顔を出され、厳しい至言をいつも訓示して頂いた大室了暗師が、突然旅立たれてしまいました。九十二歳でございました。『浄土』への執筆も多く、連載では「読者からの仏教相談」を十七回、「絵解き選択集解説」を四回、「仏教コラム」は実に二十四回

を数えました。今回追悼の意を込め、平成七年執筆頂いた「我が心の涅槃図」を掲載させて頂きました。

また、突然の変更で驚かれた方も多いと思いますが、好評頂いております林田康順先生の「法然上人と親鸞聖人」は、林田先生のお身体のご都合で休稿と致しました。一日も早いご回復をお祈りするばかりです。休稿の間の替わりとしまして、一昨年ご講演頂きました佐々木正先生の同名の原稿を掲載致します。林田先生とは全く異なる立場の先生の原稿で、驚かれた方も多いと思いますが、多面性が私たちのコンセプトでもありますのでご海容頂きます。

雑誌『浄土』

特別・維持・賛助会員の皆様

飯田実雄（駒ヶ根・安楽寺）
 巖谷勝正（目黒・祐天寺）
 魚尾孝久（三島・願成寺）
 大江田博導（仙台・西方寺）
 加藤昌康（下北沢・森巖寺）
 桑原恒久（川越・蓮馨寺）
 桑原勇慈（甲府・瑞泉寺）
 佐藤孝雄（鎌倉・高德院）
 佐藤成順（品川・願行寺）
 佐藤良純（小石川・光圓寺）
 東海林良雲（塩釜・雲上寺）
 須藤隆仙（函館・称名寺）
 高口恭典（大阪・一心寺）
 中島真成（青山・梅窓院）
 中村康雅（清水・実相寺）
 中村瑞貴（仙台・愚鈍院）
 成田昌憲（世田谷・大吉寺）
 野上智徳（静岡・宝台院）
 藤田得三（鴻巣・勝願寺）
 堀田卓文（静岡・華陽院）
 本多義敬（阿国・回向院）
 松濤泰彦（芝・寶松院）
 真野龍海（大本山清浄華院）
 水科善隆（長野・寛慶寺）

（敬称略・五十音順）

ホームページ <http://jodo.ne.jp/>

メールアドレス hounen@jodo.ne.jp

今年は寒さも厳しく、風邪も大流行とのこと、お忙しい方は特にお身体ご自愛をお祈り申し上げ、今年もよろしくお願ひ申し上げます。（長）

編集チーフ
 編集スタッフ

長谷川岱潤
 斎藤晃道
 佐山哲郎
 青木照憲
 村田洋一

浄土 八十四巻 一・三月号 頒価六百元
 年会費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷 平成二十年一月二十日
 発行 平成二十年二月一日

発行人 佐藤良純
 編集人 長谷川岱潤
 印刷所 株式会社 晩印刷

〒一〇五〇〇一一

東京都港区芝公園四・七四明照会館四階
 発行所 法然上人鑽仰会

電話 〇三三五七八六九四七
 F A X 〇三三五七八七〇三六
 振替 〇〇一八〇・八・八二二七

写経と写詠歌セットのご案内

特徴① 奉書の手本に筆ペンで直接なぞる

特徴② 法事や行事の待ち時間で写せるA4判

特徴③ 手本は当会オリジナル

特徴④ 「写経セット」は浄土宗日常勤行式。

特徴⑤ 「写詠歌セット」は宗歌と四季の和歌。



従来の写経と異なる薄墨をなぞる写経と写詠歌のセットです。扱いやすいA4版で筆ペンで写せます。手軽にかつ短時間でできる新しいタイプの写経、写詠歌ですが、高級奉書を使用していますので、墨と毛筆でも写せます。法事や各種行事、詠唱会の待ち時間に、朝夕のお参りの前後に、新たな写経・写詠歌行事にご利用下さい。

申込日 年 月 日

御名前 電話 ()

御住所 〒

《御寺院欄》 教区 組 寺・院 寺院番号

①写経セット 価額:12,000円(税込) 関東・関西 セット
(1組12枚、10組入り) ※寺院名 () を入れる・入れない

※関東版(三奉請)、関西版(四奉請)に丸をおつけ下さい。

②写詠歌セット 定価:10,000円(税込) セット
(1組5枚、20組入り)

※写経セットの寺院名入れは無料です。ご希望の場合は寺院名をお書き下さい。
※消費税と発送料は価額に含んでいます。商品お届け時の請求書にてお支払い下さい。
※ご注文をいただいてからお届けまで3週間ほどかかりますので、ご了承下さい。
※1組からご注文ご希望の方はFAXにて当会にご相談下さい。

《本頁をコピーの上、注文を記入して、法然上人鑽仰会へ
Fax (03-3578-7036)、メール (hounen@jodo.ne.jp)、または
郵送(〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館4階)下さい》

檀信徒の皆様へ

写経 セット

浄土宗勤行の解説も付いた12枚組

浄土宗の日常勤行式が
写経になった!! 写経後は
オリジナルの経本
にもなります。



薄墨手本をなぞる
オリジナルA4判

詠唱会
の
皆様へ

写詠歌 セット

宗歌「月かげ」と春夏秋冬の和歌
解説付き5首セット



詠唱でお唱えする歌、
法然上人のお歌を
筆で写して心に刻もう!

当会オリジナル新商品!!

法然上人を心から慕う
法然上人鑽仰会だから
こそ作れる高級奉書の
オリジナル手本です。

法然上人鑽仰会 FAX : 03-3578-7036

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4明照会館4階

※お問い合わせは、Fax またはメール

hounen@jodo.ne.jp へお願いします。